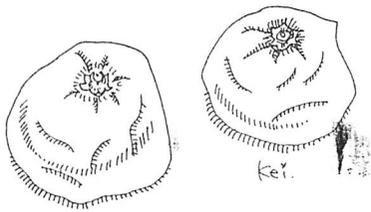


## らくがきの力



## 西川 正

にしかわ・ただし  
市民活動・まちづくりをテーマとする「ミニミニ  
シンクタンク」(ハンスオン埼玉)常務理事。  
メール: nekokan@me.com  
ツイッター: @nekokant

のボランティアスタッフは、ろう石を渡しつつ、ケンパ、ゴム段(ゴム跳び)、紙芝居、ベীগオマなど、路上系の遊びを展開した。

以下、スタッフの飲み会での証言から、ほんの一部をご紹介します。

通りがかりのおっちゃんが無意識で遊んでいたら、お母さんがマンションだからろう石持っていけないと言った、子どもが「飾っとく」と言った、塾帰りの学生が偏差値66とか書いてた、通りがかりの人がゴム段のはじっこを持ってくれた、ケンパの話で盛り上がり上がっていたら、通りすがりのおじさんも加わって遊びの話で盛り上がり、子どもが年配のおじさんのベীগオマ回しかつこよさに目を奪われ教えるを請うていた、「昔は道で遊んでましたよ」と話しかけたら「そうそう人が

20年前、埼玉県大宮市(現さいたま市)の県内一の繁華街を学区にもつ小学校の学童保育のスタッフとして働いていた。6畳4畳半3畳の狭いアパートに50人の子どもたちがひしめきあっていた。晴れた日はかならず校庭に出かけたが、雨の日はお手上げだった。ようやく晴れて外に出たら出たで、校庭までの100mほどの生活道路にも容赦なく車が入りこみ、年に数回は一触即発の場面があった。私たちがいくら口をすっぱくして言っても、飛び出していく子どもたちを止めることはできなかった。あの心臓が縮み上がるような「ヒヤリ」感はいまだに忘れがたい。これはスタッフががんばればなんとかなる問題ではないと感じていた。

その数年後、ドイツを訪問したときにベルリンの中心街の道路で子どもたちがイキイキと遊んでいる姿に驚いた。生活道路には段差があったり、曲線につくられたりして、車を邪魔

通る時だけよけたりしてね」と嬉しそうに話してくれた。若いパパママにも「描いてみませんか?」と話しかけると、ほとんどの方が「じゃあ」といつて笑顔でろう石を受けとり道路に座ってくれた。電車と線路を描いている父子に「お父さん『鉄っちゃん』でしょ」と話しかけると「実は…」とにっこり。社会人になってから、久しぶりにいろいろな人と話ができた……。

私にとっても、こんなに人の敷居が低い空気は、15年前に阪神淡路大震災の救援でたき火を囲んだとき以来だった。

その日の夜、こんなメールをいただいた。「今日、自転車で出かけて銀座通りに入ったら、車止めとボランティアの方。私が自転車から降りると『すみませんね』とにこやかにあいさつを受けました。通りを見たらなんと大規模な落書き!目をキラキラ輝かせている子どもたちと昔子どもだっ

者扱いしていた。いつか日本でもこうしなければと、その光景を胸に刻んだ。

それから15年、私は友人たちと、その大宮駅前の商店街の道路を封鎖して、「おとうさんのらくがきタイム」というイベントを開催した。

11月の日曜日午後1時、商店街の入口で車を止めて、やってきた親子に「こんにちは」と、ろう石を渡す。用意したろう石は2000個以上、すべて寄付でいただいた。さつそく道路に座りこんで描き出す子どもたち。商店街は250m、当初は埋まるかなあと心配したが、描き出したらあつという間、一時間ほどで道路はらくがきで埋めつくされた。次々に来る親子が書きを重ね、やがて道路は真っ白に。粉ができることに気づいた子どもたちは、粉のとりこになって、顔まで白くして地面と格闘。七五三のきれいな服を着た子どもたちも次々に参加。80名

た方々。昔の子どもって外で思い切り遊んで、こんな風景が当たり前だったように感じるんですよ。私は独身で、早く結婚して子どもを育てたいと思っているんですが、今日の子どもたち、とってもイキイキしていましたよね。こういう風景ってとっても心に栄養をくれます、今日は素敵な出会いがありました。ありがとうございます。」

道路はかつて「通り」だった。そして人々が交わる場所だった。その「通り」を含めてまち全体が子ども遊び場だったことを思い出してほしい、と思って企画したイベントだったが、「通り」を必要としているのは、実は子どもだけではなかった。「通り」は人のコミュニケーションによって生まれる。社会的な問題も、人々が互いに話し、感じあえる場をつくり出してはじめて、一人ひとりの、みんなの問題になるのだと実感した一日だった。